

## 存在感増すマイクロツーリズム

「観光」というと今は産業的側面で語られがちだが、平易に言えば「日常を離れて遊び、学び、ふれあうこと」ということになるだろうか。こうした意味での観光の芽は、地方にも実にたくさん散らばっている。

新聞には、古民家を改修した宿泊施設や、6次産業化で開発された新たな土産物といった地域話題が毎日のように掲載されている。近年は、インスタ映えする建物や風景、聖地巡礼、パワースポットなど、思わぬ場所や事象が誘客資源になっている。

山陽新聞社は昨年秋から「吉備の環（わ）プロジェクト」と銘打った取り組みを全社的に進めている。グループ企業を含む社員3人のチームが手分けをして岡山県内27市町村をくまなく訪問。住民の生の声を聞き、地域課題の解決につなげようという試みだ。

チームの活動は逐次、SNSや紙面に掲載。社内向けレポートでも報告される。そこには知らなかったスポットや産品が満載。和気町にある創業130年の老舗旅館「杉金」はフジの花に囲まれ素朴な雰囲気。大正から昭和初期に栄えたという美咲町の江与味鉦山跡はミニ産業遺産といった趣を醸す。ひしゃくで油をかけて祈願する勝央町・東光寺の油地蔵（県重文）は、脚、肩など油をかけた箇所の不調が治まるとされ、年配者や仏像ファンの興味を集めそうに思える。

「マイクロツーリズム」にもくくられるこれらの素材は、ウイズコロナの時代に間違いなく存在感を増している。遠出を控え、混雑を避けつつ、新たな発見を期待する人々の目が、これまで以上に身近な場所に向けられている。自治体や旅行・宿泊業者が近場を巡るプランの作成やPRに力を入れるようになったのは、その証左だろう。

受け入れを再開した訪日外国人観光客にも、日本の素朴な風物は意外と喜ばれると聞く。地元メディアに期待されるのは発信力。観光の芽が花開き豊かな果実をもたらすよう、地域と併走したい。

山陽新聞社 営業局広告本部副本部長 小野 暁



フジの花に囲まれた和気町の旅館「杉金」



勝央町の東光寺にある油地蔵